

ルドを拡大しつつあるが、仏教青年グループ、福祉関係者を中心としたグループ、産業グループなども行っている。いずれ、それらの共通構造、差異点をまとめたいと考えている。

5. ライプチヒでの第XXII回国際心理学会議への出席とヨーロッパ臨床心理学関係機関の歴訪。

1980年7月6日から12日まで、東ドイツ・ライプチヒのカール・マルクス大学を会場とし、W.ヴントがライプチヒ大学に心理学実験室をつくり実験心理学の基礎を築いて百年を記念して開催された第XXII回国際心理学会議に出席する機会に恵まれた。当教室からは、大橋・久世両教授も出席された。海外での国際会議には初めて出席したのであるが、その後、教室主催で帰朝報告が行われた。また会議後、ヨーロッパの臨床心理学関係の諸機関を歴訪することができ、筆者の中で現地体験により、諸資料を入手したり、見聞を広めることができたことは望外の喜びであった。ちなみにその主要な機関（所在地）を記しておく。ヴェルツブルグ大心理学教室（西ドイツ、ヴェルツブルグ）、マックス・プランク研究所児童精神医学研究所および付属情緒障害児収容治療施設（西ドイツ、ミュンヘン）、フロイト診療所（オーストリア、ウィーン）、ユング研究所ならびにD.カルフ女史診療室

（スイス、チューリッヒ）、サルペトリエール病院・シャルコー記念館、サン・タン病院（フランス、パリ）などであり、それぞれ現地で関係者に歓迎され、意見交換できたことは生涯の思い出になったといえる。

6. その他の活動などについて

「来談者中心療法」（上里一郎編『心理療法入門』福村出版、55.8）

「カウンセリング療法」（詫摩武俊・稲村博編『登校拒否』有斐閣、55.9）

「いじめっ子にみられる親子関係」（『教育心理』第29巻2号、56.1）

「進路指導」他3項目。（河合伊六編『教育心理学の基礎知識』福村出版、56.1）

「高校生活の危機——生活指導・精神衛生」のうち「ノイローゼ、登校拒否（drop-out、家庭内暴力も含む）」（斉藤耕二・加藤隆勝編『高校生の心理』有斐閣、56.3）

「高校期の情緒障害」（全国里親会編『中学・高校期の里子の養育技術——非行・情緒障害とその指導——』全国里親会、56.3）

（以下略）

研究経過報告

池田博和

1. 筆者の主要なテーマは、「青年期の病理と治療」にかかわる諸問題に人間学的視点から接近することにある。昨年はこの主題に関連して、登校拒否と家庭内暴力の問題をとりあげた（本紀要第27巻）が、その家族関係の問題に関心をだきながらも、今年はとくにそれを展開することはできなかった。しかしながら、新聞紙上等で「〇〇ヨット・スクール」や「〇〇牧場」などセンセーショナルな「治療法」が喧伝されている昨今、われわれはもっと正統な青年期危機治療論を具体的に公共化していかないと、ますます混乱した危険な事態に陥ってしまうのではないかと危惧しているところである。何々療法の名のもとに「外側から操作しよう」とばかりしている社会（あるいは家族）の側の発想自体が、実は彼ら青年の社会的未熟性を醸成してきた元凶なのであって、「甘えているのだから徹底的にきたえればよい」という安易な短絡思考にこそ、この問題の真の根源があるからである。重要なのは、「なぜ」彼らがそのように並はずれて、一見「甘えた」行動しかとれなくなってしまうのかというこ

とこそが解明され理解されなくてはならないし、そのことの徹底的な理解と了解とに立った上で、彼らとともにそこから社会性や自主性を育くむ生活経験の幅を広げていくよう、家族を含めて歩みだそうとするのでなくては、何ら本質的な解決にはならないのである。このような治療論を具体的に提示していく努力を今後にもむけて重ねていきたいと思うものである。

今年は、青年期病理のサブ・テーマとしてはむしろ、「思春期やせ症」の問題により多くとりくんできたが、これも未だ公表するほどの成果はあげられていない。しかしながら、この問題に関する新たな発見としては、この状態像の本質が従来いわれてきたように、単に「女になりたくない」または「大人になりたくない」といったこと、あるいは「身体図式の解体」、または周囲からの期待過剰への拒絶といったことにあるのではなく、もっと根源的にはそれらの現象の背後に「なぜ生きていかなばならないのか」という疑問、いわば「生命的存在感の自明性の稀薄さ」が底在しているということである。わ

れわれにとっては「生きていきたい」というのが自明の大前提であり、この前提の上にすべての日常生活が、ということは心理学的諸法則も、成立しているのであるが、この前提が喪失されると、どんな知覚も欲求も行動もわれわれとの共通の地平を失ってしまうのである。このところに「思春期やせ症の謎」をとく鍵があると思われる。ここから実践的治療論を構成していく試みが今後の課題となってくる。

2. 筆者の主要な関心事は以上の主題ではあるが、実際の臨床場面では青年期症例に限らず、さまざまなケースとの出会いがある。このような青年期以外の症例とのとりくみに関して、本紀要には「不安神経症」の女性の30歳になることを前にしての揺らぎと、それを通して一組の男女が真の夫婦として相互に歩みよっていくという心理療法過程について報告した。

上に述べたような生活世界の前提が喪失されている世界とはちがって、われわれと共通の世界にあって、その現存在実現のさまざまな問題に苦しんで発症してくる人びととの心理療法過程から教えられることにはまた大きいものがある。この報告にあたっては、現象学用語は勿論、専門的用語もあまり用いることなく記述したつもりである（青年期のどう自己があり、またありうるのかという問題はそれ自体、存在論的とならざるをえない）。しかしながら、そうした用語は用いなくても、その都度の面接の中で明らかにされるひとつひとつの具体的な事柄から、その背後にあるひとつの全体的な本質的構造を把握するという、それをありありと、またはいきいきと描き出すということには、きわめて現象学的な接近の姿勢が要請されるものである。こうした意味で、最も臨床心理学的な接近の原点は、やはり症例研究にあり、しかも現象学的姿勢による必要があることをあらためてまた感じた次第である。

3. もうひとつ本紀要には、「臨床青年心理学研究Ⅷ、対人恐怖の人間学、その1」を田畑治助教授ほかとの臨床青年心理研究会活動の一端として執筆したが、この主題に関しては、さきに述べた意味でかなり哲学的な用語も入ってこざるをえなくなった。ただし、本報告では症例記載だけで余裕がなくなったので、考察は次報にまわされることになったが、主眼は対人恐怖を人間学的分裂

病論の視点から、「自己表出」にかかわる「対自」と「即自」の乖離の問題として接近することにある。

4. また、今年新たに着手された仕事としては、村上英治教授と渡辺雄三氏（松蔭病院）とともに「病院心理臨床の実際」（仮題、誠信書房）を編集することがある。これは病院の臨床現場において、すでに多くの心理臨床家がそれぞれ独自の地道な活動をしておられるので、そうしたそれぞれの病院実践の日常活動を、ひとつひとつのモデルとして具体的な事例とのとりくみの記述を通してあらわにし、病院心理臨床家はいかにあるべきかがおのずから明らかになってくることを意図するものであるが、この目的を具現していくのは、最初の予想に反してはるかに困難なものであると感じているところである。

この中で、筆者としては強い自明性の喪失感と激しい自殺企図とをくりかえした青年期の女性ケースをとりあげ、彼女がみごとに立ち直っていった経過の中で、あらためて、心理臨床家がまず相手を徹底的に理解し、その立場に立たねばならないこと（そのために異常心理学的、病理学的知見を修得し、自らのものにしておかねばならないこと）、それによってケースとの真の信頼関係を樹立し、信頼しきらねばならないこと、そのためには場合によっては、心理療法家が病院の中で精神科医をはじめとする他職種の人びとと連携し、入退院その他の決定などに関してもイニシアティブをもたねばならないことなどを具体的な場合に即して書いていきたいと考えている。

5. もうひとつの新たな研究計画としては、1に述べたことの二環として、異常心理学的接近ばかりではなく、いわゆる「正常な」人たちとの関係の中で、その青年期ののりこえのあり方を検討していきたいと考えている。すなわち、「健康な」青年の青年期精神発達過程について、筆者が非常勤ででている短大の学生たち、およびやはり非常勤講師である研究生の文珠さんの協力をえて、その具体的なありようを解明していく計画である。そのために、まずとくに精神的な問題があるわけではない学生を10名ほど選び、一層の精神的健全さを増進する目的でカウンセリング状況を設定し、定期的に非指示的な面接を重ね、3年間の追跡を行っていく中で自然に語られてくる彼女たちの青年期のありようから青年期一般の何たるかが明確化されていくことになれば幸いである。

研究経過報告

鹿内啓子

1 個人研究 昨年2月から3月にかけて、成功・失敗の原因帰属と固執性との関係に関する実験を行なったが、実験計画の不備から失敗に終わった。その後、適切な実験計画をたてて再度実験をしようと意図していたが、これまでのところまだ実施できていない。昨年8月から今年7月までの1年間では、実験をやることができず、もっぱら文献研究に終始した。しかし文献研究についても論文として成果があらわれているわけではない。

2 共同研究 一つには、大橋正夫教授をチーフとする「中学生の対人関係に関する追跡的研究」に、これまでと同様参加してきた。名大附属中学の1年生を対象に、4月から7月まで追跡的に調査したデータを昨年に引き

続き分析した。これについては、日本心理学会第45回大会で発表する予定である。

もう一つには、若林満助教授が愛知県婦人労働サービスセンターから依頼された「婦人に関する職場適応研究会」に1メンバーとして参加した。今年1月から2月にかけて、各職種の独身女性、既婚女性およびその配偶者に対して質問紙調査を行なった。この成果は、「働く婦人に関する意識調査——職場適応の構造——」（愛知県婦人労働サービスセンター、1981）にまとめられている。また日本心理学会第45回大会においても発表する予定である。

研究経過報告

二宮克美

1. 個人研究について

児童の道徳的判断の発達に関心をもち、とくにGutkinの4段階の検討を通して、その発達の様相を明らかにしようと努力している。昨年は「過失」の例話で確認されたGutkinの4段階が、「嘘」の例話においてもみられることを報告した。今年3月には、「盗み」の例話を作成し、そこでもGutkinの4段階がみられるのかの検討を行なった。この結果は、9月中旬の日本心理学会第45回大会で、「児童の道徳的判断に関する一研究：「盗み」についての道徳的判断の発達」と題して発表する。

6月には、以前実施した研究の追試実験を行なった。それは、例話中の主人公が自己の場合と他者の場合とでは、道徳的判断にどのような違いがあらわれるのかをみようと試みたものである。この結果は、なるべく早い機会に論文としてまとめる予定である。

今年3月に、次の論文が公刊された。

「児童の道徳的判断に及ぼす意図と結果の情報提示順序の効果」 教育心理学研究 第29巻 61-65.

これに続くものとして、「児童の道徳的判断の一指標としての反応潜時の検討」をまとめ終えた段階である。

2. 共同研究について

久世敏雄教授の指導のもとに、青年期の社会的態度の発達と変容の過程を検討してきた。今年は、個々の項目

水準での分析を中心に検討し、その成果は本紀要の「中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究(Ⅲ)」にまとめられている。さらに、中学の3年間ならびに高校の3年間有効な縦断的データを用いて、中学および高校の各3年間における社会的態度の発達過程を検討した。その成果は同じく本紀要の「中学生・高校生の社会的態度に関する縦断的研究(Ⅳ)」にまとめられている。

また、中学生の進路選択にかかわる問題について、久世敏雄教授の指導により実施した調査の結果を整理した。それは、本紀要の「中学生の進路選択と学校生活に対する意識に関する研究」としてまとめられている。

その他、名古屋大学教養部八重島建二教授の指導で、一昨年実施した児童の遊びに及ぼすモデルの示範の効果に関する研究を、英文(Effects of the exposure of children to a model's behavior in a game)でほぼまとめ終ったところである。

3. その他

名古屋女子大学三輪弘道教授の編集による「幼児の心理と保育」(福村出版、1982年春刊行予定)の中の「道徳性の発達」の章を執筆した。道徳性に関する研究をいろいろながめるなかで、自分の全体的な視野をひろげるのに役立つところがあった。